

P05

埋伏した下顎第一大臼歯を牽引誘導した一症例

○逢坂洋輔, 田村翔悟, 柏村晴子, 土橋容子, 酒井亜希子, 阿部亜美, 岡 暁子, 尾崎正雄
(福岡歯大・成育小児歯)

【諸言】小児の口腔において、埋伏等の萌出異常は小児の顎・顔面の発達に大きく影響する。従って、早期に発見し、適切な時期に萌出誘導を行い、正常な咬合を獲得させることは極めて大切である。今回我々は、下顎右側第一大臼歯の完全埋伏症例に対して、萌出誘導を行ったところ興味有る知見を得たので報告する。

【症例】

患者:8歳1か月 男児

主訴:埋伏 $\overline{6}$ 部精査希望。

現病歴:平成25年1月, $\overline{6}$ の埋伏を近医に指摘され、平成25年8月、当科を受診された。

既往歴:特記事項なし。

口腔内所見:Hellman 歯齢ⅢA期, $\overline{6}$ 未萌出。

パノラマエックス線所見: $\overline{6}$ は、下顎骨内に埋伏し歯冠周囲に境界明瞭なエックス線透過像を認めた。一部は歯肉と連続していた。 $\overline{6}$ の歯根は、ほぼ完成し、根尖部は皮質骨接して彎曲をしていた。

臨床診断: $\overline{6}$ 含菌性嚢胞

【処置および経過】局所麻酔下にて, $\overline{6}$ 歯冠部歯肉の切除を行った。歯肉と連続した, $\overline{6}$ 歯冠部周囲は、充実性の結合組織で覆われおり、嚢胞腔は認めなかった。E $\overline{1}$ Eを固定源とするリングルアーチタイプの装置にて $\overline{6}$ の牽引を行った。8か月後、口腔内に歯冠の一部萌出を認めた。

【考察および結論】開窓時に採取した組織は、密な線維性結合組織像を示しており、嚢胞様所見はなかった。このため、埋伏の原因は $\overline{6}$ 歯嚢の線維化と考えられた。 $\overline{6}$ 埋伏歯の牽引には強固な固定源を必要とするが、幸いⅢA期であったこと、 $\overline{7}$ 歯胚の位置が牽引を障害しなかったことなどから、萌出を誘導することができた。しかしながら、埋伏歯の発見の遅れは、治療をより難しくし牽引が困難になることが予測されるため、このような症例では、ⅡC～ⅢA期でのパノラマエックス線による精査が、重要であることが再確認された。

P06

当院における咬合誘導患者の実態

○中島麻莉菜 伊賀上洋輔 若松美咲 西田茉央 高裕子 松元一生 宮川尚之
(医)まほうつ会 みやかわ小児矯正歯科

【目的】当院にて咬合誘導を行った小児について、定期的口腔管理から移行した場合と、初めから不正咬合を主訴として来院した場合について比較検討する。

【方法】当院で咬合誘導検査を受診した直近5年間の小児443名(男児187名、女児256名)を不正咬合を主訴として初診から6ヶ月以内に咬合誘導検査を行った群(以下主訴群)と、6ヶ月以上の管理期間後に検査を行った群(以下移行群)に分類し、両群の割合、不正咬合の割合、咬合誘導開始年齢、終了後の転帰について比較検討を行った。

【結果】主訴の割合は移行群が75.2%であった。主訴の男女比は主訴群で1:1.8、移行群で1:1.3であり、当院の咬合誘導患者は、定期的な口腔管理から移行する者が多かった。

不正咬合の割合は主訴群においては、上下顎前突1.8%、叢生32.7%、反対咬合23.6%、開咬3.6%、上顎前突38.2%で、移行群においては順に、2.1%、25.5%、23.1%、5.7%、43.5%であった。

咬合誘導開始年齢は移行群が9.1±1.8歳、主訴群が10.0±2.7歳であった。治療後の転帰は移行群の87.7%、主訴群の81.7%が継続しており、群間に有意差は認められなかった。

【考察】主訴群において女児の比率が高いのは、保護者の女児に対する審美的要求の高さを示しているものと考えられる。移行群の開始年齢が早かったのは、不正咬合を早期に発見し、対処する事が出来た事を示すと思われる。不正咬合別に検討すると、叢生および上顎前突の場合では、移行群の開始年齢が1年以上有意に早かった。一方群内で比較すると、主訴群では反対咬合が、移行群では反対咬合、開咬の開始年齢が早かった。移行群で開咬の割合が高いのは、舌癖等の習癖を早期に発見出来るからであろう。

本研究を通して、適切な時期に適切な咬合誘導治療を開始出来るという定期的管理の有効性や必要性を再認識すること出来た。